

〈エクソダス〉2011 通信 1

この大災害に、何を考え、何を企てるか

——「オルタセミナー特別編——東日本大震災：私・たちは、〈なに〉をなすべきか？」（3/27）を振り返る

いまだに数えきることができないほど多くの人々の生命を奪った巨大津波の猛威と、それを「引き金」として発生した、広範囲で深刻な放射能汚染を累積し続ける原子力災害を目の辺りにして、私たちは意気消沈し、思考停止の状態に陥ってしまいそうになります。

しかし、そうであればなおさら、私たちの「生の保障」を破壊し、多数の人々を「生き難さ」に追いやるこの国の支配システムに対して、私たちがこの数年、異議や憤りを表現し続けてきたことに改めて立ち返りながら、自分たちがこの事態の中でどのように〈前〉に踏み出し、自らの持てる力を最大限、結集させるかが問われているはずです。このような思いから、3月27日（日）、表記のような「オルタセミナー」を行いました。

今回の「オルタセミナー」では、私たちの予想以上に多くの参加者があった他、この国でのネオリベ批判の嚆矢を切った渋谷望さんと、アクティビストで「原子力都市」（2010年以文社）の著者の矢部史郎さんも、県外から参加してくれました。

「被災者／国家・電力資本／私たち富山で生きる者たち」の間に本当に「三角形」の関係が成立するために、今、私たちはそこに〈なに〉を投げこむのか。そのことを考えあうための1つの試みとして、今回の「オルタセミナー」の「Part I」では、「被災者」、「国家／電力」、「被災地以外の者」という役割のどれかを割り振られた参加者が、それぞれの立場から一番言いたいことを、アピールするというを行いました。

矢部さんは、現在、愛知県の実家を原子力災害からの「避難所」として、家族と共に東京を脱出していますが、そこに、渋谷さんも息子さんと一緒に、一時避難していたそうです。「オルタセミナー」の「Part II」では、「発言：〈エクソダス（脱出）〉の途上で——「原子力都市」からの」と題して、渋谷さんと矢部さんのそれぞれに、この事態に際して考えていることを語ってもらいました。また、今回の「オルタセミナー」の「Part III」では、「Part I」と「Part II」の論議を踏まえながら、参加者同士でのフリーディスカッションが行なわれました。

以下、今回の「オルタセミナー」の、とりわけ、「Part II」と「Part III」で、特に大事だと思われる意見・発言を紹介します。

「Part ii」での発言から

矢部：東京の水道水からも放射能が検出されるという状況の中で、東京という都市のポジションが大きく揺らいでいて、東京は大震災の被害を受けた東北の被災地の復旧を支援する側なのか、それとも、東京自体が今すぐ避難すべき原子力災害の被災地なのかが、問われざる

を得なくなっている。自分は東京からの「エクソダス（脱出）」を提起しているが、東京に残っている僕の仲間たちは、「放射能汚染地帯の東京での労働への動員を拒否せよ！」というスローガンを掲げて、原子力災害に対する「ゼネスト」を訴えている。そのような、東京からの「エクソダス」と東京での「ゼネスト」とは、自分たちの運動の「両輪」であって、互いに矛盾しないものであると考えている。

今、福島第1原発では確実に「炉心溶融」が起きていて、核燃料が被覆管を突き破って格納容器の外に飛び出るかもしれないような状態になっている。不謹慎に聞こえるかもしれないが、それに喩えて言うと、今、僕たち自身がこの社会の中でそのように「暴走」する核燃料のような存在となって、企業社会といったこれまでの社会の被覆管を突き破ってシステムの外へと飛び出さねばならないのではないか。

首都圏の1都4県（神奈川・千葉・埼玉・茨城）の総人口が3800万人で、そのように、人類がこれまでに経験したことのない規模の超巨大都市が成立しているというのが、僕の書いた「原子力都市」という本の論旨の1つになっている。3800万人の内、どれだけの人が実際に西日本や北海道に脱出するのかは分からないが、子どもや若い女性や母親たちといった、とりわけ放射能の影響に敏感な人たちが中心になって移動することになると思う。その際に、その人たちが単に被災者としてサポートを受けたり、コントロールされることを超えて、自ら運動を起こす主体になるような契機も、そこに孕まれているだろう。そのような人たちが元からの住民と出会うことで、ある種の「化学反応」が生じて、そこで何か面白いことが始まるのではないかということ「夢想」しているのだが、それは、自分にとっては大いに「楽しみ」なことだ。

渋谷：3月17日に東京から4歳の息子を連れて、愛知県・春日井市の矢部さんの実家に避難して、最終的に3月23日に東京に戻ったのだが、その翌日に、東京の水道水から放射性物質が検出された。そのことはすでに予想はしていて、愛知県から水をたくさん持ち帰っておいだったので、今のところは飲み水の「備蓄」はあるのだが、この後の子どもの飲み水のことを考えると不安でたまらない。

富山に来る数日前に、東京の何人かの仲間たちと一緒に、東京で何ができるかをめぐって話し合う場をもった。その中で、まず、何よりも、自分たちの問題を「可視化」させることが大事だし、そのための手段として、今、東京に住んでいてとりわけ何に困っているのかという声をすくい上げるような、聞き取り調査ということもあるだろうという話が、出ていた。僕は、今住んでいる家に2年前に引っ越してきて、近所には全く知人がいないのだが、僕のように、東京で孤立して住んでいて、不安を抱えながら生きている人たちがたくさんいることは、想像に難くない。そういう人たちの声を集めるためにも、東京に住む者同士としての近隣住民のネットワークが必要ではないか。

水道水から放射能が出た時に、乳児の水道水の摂取の制限が望ましいということで赤ちゃんのいる家庭にはペットボトルの水が配布されたが、そもそも、乳児は水道水の摂取がダメで幼児なら大丈夫だという区別の根拠があやふやだし、結局、どの範囲まで水を配布できるかで線引きしているだけのことでしかない。そのように、安全な水の供給ということも含めて、行政に要求することはたくさんあるし、安全な飲み水を入手するための交通費をタダにせよ！という要求も、出していいはずだ。

今、レベッカ・ソルニットの「災害ユートピア」（亜紀書房）という本を読んでいるが、この本は、この未曾有の事態を自分たちがどう生き延びるかを考える上での、1つの指標となるべきものだろう。その本の中に、「災害が起きた時に生まれる人々の自発的な相互扶助のネ

ットワークや運動を、直接、被災地にはいない人たちが破壊して、災害後の世界がどうあるかをコントロールしようとする」という一節がある。この国でも、そうした災害後の世界のあり方をめぐるせめぎあい起きるのではないかと思うが、そこをどう乗り切るかが、今後の自分たちにとって大きな課題ではないかと考えている。

「Part iii」での論議から

参加者A：佐賀県武雄市は人口5万人の小さな町だが、「武雄市タウンステイ構想」ということを、その市長自身が積極的に打ち出している。武雄市では、2千人の被災者の受け入れを謳っていて、被災者の当座の生活費やそこに避難するための交通費も支給することを、明言している。一方、富山市は、他の自治体の受け入れ体制を伺っているだけで、空いている公営住宅の戸数をそのまま、被災者の受入人数にしているに過ぎない。先程、「避難都市を、今ここに！」（この「通信」に別添）という今日の集まりを企画した者からの祈りのようなことばが朗読されたが、この富山でも「避難都市宣言」を行って、無条件かつ生活費の支給も込みで被災者を受け入れることを、市の行政に求めるということがあってもいい、と思う。ベーシック・インカムをめぐって無条件の生の肯定を考えようとしてきたことが、今こそ、試されているのではないか。

参加者B：先日、読んだ新聞の「東北の自立とは何か」という論説の中で、東京の「電力植民地」として東北があることからどう転換し、いかに新しい価値や方向性を生み出すことができるかが問われている、と書かれていた。今回の大震災の前まで、自分たちは、沖縄の「自己決定権の樹立」を求める動きとどのように連帯するのかを考えようとしてきた。もう一度、そこに立ち返って、東北にとっての「自己決定権の樹立」や、国家からの「自立」とは何であるのかという視点から、論じることが必要なのではないか。同時に、「軍事植民地」としての沖縄と「電力植民地」としての東北とを一連なりのものとして捉える視線が、今のような事態であればなおさら、求められているように思う。

渋谷：僕の連れあいが山谷で野宿者支援をしている関係で、印象深い話を聞いた。今回、巨大な津波によって壊滅的な被害を受けた東北のある町の出身者なのだが、家庭内でいじめられて家族と縁を切って東京に出てきたのだが、今回の大震災の話を聞いて、「地震のことは気になるが、親爺が生きていたら、ヤバイな」とつぶやいていたそうだ。そういう話を聞くと複雑な気持ちになるが、そういう人が少なからずいるだろう。

参加者C：今の渋谷さんの話の中の人、津波の被害によって故郷を失う以前に、すでに故郷や「ホーム」を失っていたということだと思う。今回の大震災によって、一挙に数十万人もの人たちがホームレス状態になってしまった。私は富山でホームレス支援をしているが、そういう人たちがどうしているか気にかかる。どうしても、その両方を重ねて見てしまうのだが、そこをつなげて考えることが必要なのではないか。

矢部：本来であれば、大きな労働組合が、原子力災害に対する「ゼネスト」を呼びかけたり、若い労働者や乳幼児を抱える女性労働者が避難することを支援したりしてもいいはずだと思うが、今の労働組合は腐りきっていて、そのようなことさえしようとしない。かつての社会

運動の中で労働組合が占めていたポジションは、もはや完全に失われている。むしろ、既成労組に属していない、「周辺化」された青年や女性たちが、自発的なネットワークを創り出すことから、再スタートすることが必要な状況のように思う。

ところで、今、マスコミは至るところで「放射能は大丈夫」と言っているが、それは、結局、「オレは大丈夫」ということであって、「子どもは大丈夫なのか」、「妊婦は大丈夫なのか」ということが、そこには全くない。そのような放射能の影響に一番敏感な存在に対する配慮を社会全体が喪失しているという状態を反転させる上で、最も主力となるのが、お母さんたちではないか。お母さんたちが一番事態を深刻に受け止めて正確に理解しているし、メディアの翼賛的な状況や、国家の政策に対して、No!を突きつける最も先頭に立つのが、彼女たちではないかと思う。

現在、原子力災害によって、福島全域から関東地方全域までの広大な範囲で大気や水道水が放射能に汚染されるという事態が生じています。しかし、政府は、福島第1原発から半径30kmまでのごく限定された範囲しか原発事故の被災地として認定せず、それ以外の原子力災害の被災地にいる人たちは何ら公的な支援の対象にならないことが、そこから人々が脱出しようとするのを阻む一因になっています。それに対して、今回の「オルタセミナー」では、炊き出しや、生活保護取得の際の行政への同行支援といった、これまでの自分たちのホームレス支援のあり方を組み立て直して、「ワークシェア」や「フードシェア」、住居や生活物資への「アプローチ」といった被災者へのトータルなサポートを行うことをめざす「被災難民脱出支援ネット」の試みが提起されています。

人間にとって最も基本的な「コモンズ（共有物）」であるはずの安全な飲み水や空気の摂取が多くの人々に困難になるという、かつてないような状況があります。「被災難民脱出支援ネット」の試みが、そうした状況に対する対抗性をもちうるためにも、富山という、これまで「日本」列島を構成してきた地域を、従来からの住民と新たにやって来た避難民とで平等に分ちあうための、一つの「コモンズ」として構想する、そして、そのような「コモンズ」の連合性としてこの「日本」列島を再構成する。そのようなこの事態に相応しい「歓待」の思想とでもいうものを創り出すことが、今、私たちに求められているように思います。同時に、そのことは、乳幼児という、未来の世界を生きる存在をこの社会に迎え入れ、安全な環境を保障するという「歓待」さえも完全に欠落した、この国の政治・経済のあり方からの決別をいかに進めるかということ抜きには、ありえないことでしょう。

そのような意味でも、被災地からの文字通りの「エクソダス」への支援と、今回の事態を引き起こすに至ったこの国の政治・経済システムからの「エクソダス」とをどのように互いに一体のこととして展開・構想しうるのか。そのことが、今回の大震災／原子力災害によって、多くの人々が「生」の根幹までも脅かされ、私たちの生きる社会の中に容易には回復しがたい「亀裂」が生じているという現在の状況を、この国の支配のシステムに亀裂を入れることへといかに「反転」させるか——私たちは、この「反転」を日本（国家—社会）の構成的解体と言おうとしています——を考えるための、一つの重要なポイントである、と思います。

今回の「オルタセミナー」では、県外から駆けつけてくれた渋谷さんと矢部さんの発言にも大いに刺激されながら、活発な論議を行うことができました。その中に、この事態の中で私たちが〈なに〉をなすべきかを考えるための貴重なヒントや手がかりを、いくつも得ることができたように感じています。